

第6回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム

第2分科会 議事録

(コーディネーター鹿住氏)

改めまして、こんにちは。

今、ご紹介いただきましたコーディネーター兼事例報告ということで担当させていただく、JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）の鹿住と申します。名前を鹿住とって、鹿が住むということで、私も全国の森林の保全活動しているんですけども、丹沢もそうだと思いますが、最近シカが大変多くて、生えてきたものを食べてしまうということで、シカが大変邪魔なものとして扱われていて、鹿が住むという名前で大変身を小さくするようなどころがあります。今日は全国で活動している事例を簡単に紹介をさせていただくと、分科会の進行をさせていただきますので、ご協力をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

この分科会なんですけれども、テーマがNPOの活性化を考えるということで、こちらのプログラムですと、事例報告が17ページから始まるんですけれども、森林水源環境保全・再生におけるNPOの役割を考えるということになっております。

今日は、3つのNPOの事例を紹介することになるんですけれども、この分科会で特に議論したいのは、まずNPOの取り組み自体を知ることが1点です。NPOといいましても、よく最近NPO法人という法人格をもってNPOと言うことが多いんですけれども、もう少し幅広く、今日は財団法人の方もいらっしゃるし、広い意味での民間の非営利の組織ということを対象にしたNPOというとらえ方をしていただければよいと思います。NPO法人自体は今3万6,000団体ぐらいあるようなんですけれども、今日は広い意味でのNPOの活動の事例を知るというのを1つ目の趣旨として考えております。

2つ目は、NPOの役割を考える。NPOがこの水源の保全に向けてどういった役割ができるのかということで、NPOの役割を考えるということが2つ目です。

3つ目としては、NPOは法人格を持っているところで3万6,000法人で、法人格を持っていないところも含めてたくさんあり、新聞でもNPOという言葉が出

てこない日はないぐらいになっているんですけども、日本の社会に根づいているかというところはまだまだというふうに皆さんもご実感されているんじゃないかと思うんですね。そういう意味で、どうしたらNPOを活性化することができるんだろうかということ、それが3点目ということです。NPOの事例を知る、NPOの役割を考える、NPOを活性化させる仕組みについて考えるということで議論を進めていきたいと思います。

今日は、この20年の計画だと先ほど知事から話がありましたけど、そのうち5年間で事業を進めていくうちの2年目が終わろうとしていて、今度3年目、中間に入るということで、中間の時点でのフォーラムということで、結論を出すというよりも、NPOの可能性について、こういう可能性があるんじゃないかというような意見を出して今後の施策に反映させていくということで、皆さんからの自由な意見も含めて可能性というものも出し合えればいいなというふうに考えております。

今日ご参加いただいている皆さんにちょっとお伺いしたいんですけども、NPOにご関心があるということでご参加いただいていると思うんですけども、この中で実際に自分がNPOに所属して活動をしていますというような方、いらっしゃいますでしょうか。手を挙げていただいて、半分ぐらいですか。ほかの方は特に活動はしてないけれども、NPOということについて関心があるという方でしょうか。後はいろいろな立場の方がいると思います。

そういう意味では、NPOに所属している方が半分ぐらいいらっしゃるということです。先ほど質問用紙のことについて説明がありましたけれども、この後事例報告等ありますけれども、NPOの方はご自身が多分活動する上において課題とかそういうことを持っていると思うんですけども、そういったことをぜひ質問用紙に書いていただければなと思っています。

そのNPOの自分の実際の活動をしている上での課題、あるいは先ほど申し上げた趣旨で、NPOの役割を考えるということですので、自分はNPOがこういう役割を担うべきじゃないかと、あるいは担ってほしいと考えているんですけども、どうだろうかというような意見というんでしょうか、そんな質問もこちらの事例報告の方々に投げかけていただくというようなことで質問用紙に書いていただいてもいいかなと思います。あるいは、NPOを活性化するためのいいアイデア

ア、こういうものはどうだろうかというようなことも、質問用紙に書いていただければと思いますのでお願いしたいと思います。

これから早速事例報告に移っていきますけれども、まず事例を3団体報告していきます。その後に、少しそのNPOの役割についてこのパネラーと私でディスカッションをしていきます。最後に、皆さんからの質問やご意見をお受けして、また話をするという、そういう2時間の過ごし方にしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、ご紹介がおくれてしまいましたけれども、まず最初に事例報告していただきます、特定非営利活動法人みろく山の会理事の有川百合子さんです。

(有川氏)

皆様、こんにちは。横浜に事務所がございます、みろく山の会の有川と申します。

今日は、私たちがどのようなことを丹沢でしているか、そういうことを踏まえて皆様にご案内していきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

(コーディネーター鹿住氏)

2番目に事例報告していただきます、財団法人日本自然保護協会の茅野恒秀さん。

(茅野氏)

どうも、こんにちは。日本自然保護協会の茅野と申します。

私どもは東京に本部がありまして、全国を幅広く自然保護問題を解決したり、いろいろな施策提言をしたり、環境教育の人材を養成したりということで手広く活動をしている、会員2万人ほどの団体でございます。

また、後ほど、私たちがモデルプロジェクトとして取り組んでいる赤谷プロジェクトという流域全体を再生していこうという、この取り組みをご紹介したいと思います。どうぞよろしくお願ひします。(拍手)

(コーディネーター鹿住氏)

それでは、有川さん、早速事例報告をお願いしたいと思います。
よろしくお願いいたします。

(有川氏)

では、私どもみろく山の会が、丹沢という大切なホームグラウンドで、どのようにして丹沢の保全と再生に向けて事業を行っているかというのをご紹介していきたいと思います。

皆さん、地球はよく水の惑星と言われています。地球上の水の量のうち、全体の97.5%は海水と言われています。淡水は2.5%、でもこの淡水の中は大体氷とか地下水、ちょっとグラフの一部が濃くなっていますが、この部分、この0.01%が私たちが使える水ということなんですね。貴重なこの水の一部を丹沢は育んでくれているところです。

では、丹沢は今どう状況なんだろうといいますが、この写真は塔ノ岳からここがずっと表尾根です。表尾根を見たところですが、でも、今日あたりはこういうふうになってないんですね。もうこの間の雨で雪が解けました。これは塔ノ岳のトイレです。ちょうどトイレのところがこういうふうに掘ってありますので、雪の量がわかると思ひまして、この写真を使いました。

4月になりますと、これはもう4月の末ごろですね。キクザキイチゲ、ツルシロカネソウ、このようなきれいな花がどんどん咲いてきます。丹沢はすばらしいところです。もう少したちますと、これは堂平ですけど、先ほど鹿住さんからもお話ございましたように、林床植物が何もありません。シカの採食にあったんですね。

もうちょっとたちますと、これは5月の末から6月の初め、トウゴクミツバツツジなどが咲いてきます。これは塔ノ岳からちょっと下ったところなんですけども、やはりこのようにここに金網がありますね。「この写真、いいんだけど残念だね、こんな金網入れなきゃよかったのに」って言われましたが、この金網があるところが丹沢の特徴です。そして、塔ノ岳から丹沢山のほうへ向かってちょっと行ったところ、シロヤシオがこのようにとてもすてきに咲いています。

夏になりますと、このように沢登り、丹沢の丹は旧朝鮮語で沢とか谷をあらわ

すというように、沢が大変多いです。このようなきれいな水を育んでいる丹沢。では、その丹沢で今何が起きているか。首都圏から近いということもあり私も出かけておりますが、オーバーユースの問題があります。オーバーユースは、やはりゴミがいっぱいあるということもあります。それから、水源への影響などいろいろな問題が起きてきます。登山道の荒廃もあります。水質の汚染もあります。

これが、ゴールデンウィークの大山の山頂の様子です。普段はこんな子どもたちは登ってこないんですけど、これは5月5日の日。子どもの日ですので、子どもたちが大変多いです。いろいろな方たちが登ってきています。大山へは、一番多いときはどのぐらいの人たちが登ってくると思いますか？ 5,000人近くは登ってくるんですよ。

ゴミはどうかといいますと、ここが大山ですので、大山のここの追分16丁目、何トンって数字であらわせませんので、大体丸であらわしています。この丸、大山の16丁目にもありますね。そしてここから登りまして、ここ二ノ塔にもあります。それから、新大日、この茶色いところはゴミです。この白いところはもう撤去しましたよという印です。それから、尊仏山荘の北、オバケ沢です。ちょっとまだ残っていますね。それからここにもう一つあります。これはどういうことかと申しますと、これが先ほど一番大きかった新大日の山小屋の前の斜面のゴミです。すごいゴミです。これ地面は全然見えません。これは、何年かかったら回収できるんだろうと思ったんですけども、意外と早く回収できました。松沢県知事ですね。皆さん面識あると思いますけど、知事も視察なさっていますが、もうこのときはきれいを取ってあるんです。今の状態はこんな状態です、オドリコソウなどが出てきて。ここは木を伐採してくださったんですよ。ですから、光が大変入りますので、このようにきれいになっております。このように斜面が厳しいので、ゴミを拾うときも大変苦労しましたけど、今はこのような状態です。

それから、先ほど丸印のありました二ノ塔です。ここにもやはり昔山小屋がありまして、その1軒分の山小屋のゴミがありました。だから、トタンやら柱やらいろいろなものが捨ててあったんですけど、これはもう最終段階です。ここに1m50cmぐらいの穴が掘ってあって、その中にゴミがいっぱい捨てられてました。これは篩なんですけど、これでゴミだけふるって、土はここに残して回収しまし

た。今の状態はこんな状態です。青々と草が生えてきました。もうここは、完全に再生しましたね。

これは先ほどの塔ノ岳のオバケ沢のゴミです。このようにブルーシートを敷いて、その上にゴミを拾って準備をしています。本番の1日前には宿泊組が塔ノ岳の尊仏山荘に泊まって、このようにみんなで拾ってきたものをモッコに集めております。これは大成建設さんから120万円の助成金をいただきました。このゴミを運ぶお金で、ヘリで下ろしました。こういう長い鉄の柱みたいなのは、背負って下ろすとなると大変ですよ。そこで、ヘリを使いました。他のものはどういうふうにして回収したかといいますと、全部この斜面から山頂へ上げなければいけないんですね。ほかのところも全部そうですけども、バケツを利用し、このようにバケツリレーで全部山頂に上げ、ドラム缶に入れて、ヘリで下ろしました。

これはオバケ沢の現在の様子です。シカが食べないバイケイソウがこのように茂っております。でも、先ほど茶色い部分がありましたね。斜度がきついで、雨が降ったり豪雨になりますと、その土が流れて下にあったこういう古いゴミや缶が出てきちゃうんですね。現在はこういう状態です。

これは、先ほど大山に大きな丸印がありました追分16丁目、現在はこういう感じですよ。もっと近づいてみますと、いろいろな瓶がありますね、瓶やら缶やら。これも、大きなゴミを拾った後、小さなゴミも残さないようにガラスなどの破片をブルーシートの上に集めて拾っております。手を切る危険があるのでこういう手袋をしています。汚いゴミなので破傷風になるんじゃないかと皆さん心配していましたから、指先の丈夫な手袋をして拾っております。ゴミ撤去の後に植樹をしました。シカの採食に遭わないように、こういうネットをかぶせてあります。この建物知事も視察なさってますが、これはゴミですよ。塔ノ岳の日の出山荘です。超大型ゴミの何ものでもないような気がします。ここは特別保護地区です。ここにこれだけのものがあります。

大体今は登山者のマナーも大変よくなりまして、ゴミの撤去は主だったところはもう全部きれいになってきたなと思っております。登山道にも大体ゴミはもうなくなってきました。そこで、みろく山の会は最近こういう水切り、それからこれは初期のころの登山道の補修です。この中に砂利を入れて、これ麻の袋ですけど、こういう麻の袋に砂利を入れて、こう敷いて、登山道の整備を行っております。

す。大倉尾根に登られた方は、最近水切りがすごく増えたねっておっしゃってくださるんですけども、みろく山の会が行っています。

それから、登山道の利用実態調査、こういうのも行っています。これは大山なんですけど、こういう雪のときもありました。

それから水質調査、これは4月の末ですが、08年はまだ雪がこんなに残っています。ここは丹沢山から蛭ヶ岳に向けてちょっと行ったところで不動の峰です。

それと、植樹ですが、みろくは10年ごとに植樹を行っています。10周年の時には、天神平に約60本植樹しました。ブナとそれからオオヤマザクラです。でも、オオヤマザクラは1本も残ることなく全滅でした。皆さんはお花見が楽しみだなんて言って植えたんですけども、全部枯れてしまいました。ブナは今でも元気に成長しています。そして、天神平では草刈り、それからブナが大きくなるまでカヤなどに侵食されないように、草刈りや土壌調査など、生育調査や植物調査などもやってきました。

今山に登ると、登山者は大体中高年が多いですね。若い人には余りお会いすることがないです。そこで、次世代を担う子どもたちに水の大切さ、その水を育んでいる丹沢の大切さや自然環境の大切さなど、野外での遊びや自然観察を通して感じて欲しいということで、夏休み親子自然探検隊というのを行っております。なぜこれ親子かといいますと、家庭でも丹沢のことを話題にして、自然環境の大切さを話し合ってもらいたいと思うからです。

では、どんなことをしているかというのをご紹介します。場所はここです。これ、西丹沢にあります皆瀬川です。皆瀬川というのは、丹沢は1,500万年前火山島だったということを証明できる場所なんです。こういう大きなアオサンゴの化石があります。それからキクメイシサンゴ、こういったものがあるんですね。これをメインに据えています。これを発見なさった門田真人先生、化石の第一人者です。この先生を講師にお願いしております。

これは山北の駅の前にふるさと交流館というのがあります。そこを、お借りして、化石を展示し、子どもたちにまず見てもらおうんですね。カメノコキクメイシサンゴ化石、こういうきれいなのが見つかるよ、自分で見つけてねということで。これはもう磨いたものですけども、こういうきれいなのが出てくるんですね。これは門田先生です。先生はとてもお話しが上手で、子どもたちが興味を持つよ

うにいろいろな話をしてくださいます。私たちは、自然の中での注意事項、自然の中に入って行くのに気をつけることなどをオリエンテーションしております。そして、バスでここまで来て、それからこの急な坂道をおりて、川へ入っていきます。危険なところにはスタッフが並んで、けがをしないようにサポートします。

これは、台風の後で、水量が大変多いときの写真です。でも、中止しなかったので、申し込まれた方は全員が参加なさいました。かえって子どもたちは喜んだみたいですけど。膝から下の水量です。このぐらいの水だと心配なく歩けます。夏ですし7月の最終の日曜日にしていきますので、水の中を歩くのがとても楽しいみたいです。化石を見つけていますけど、のぞいているのは子どもを差しおいて大人のほうが多いですね。そして、ここではササ舟をつくって流しています。これは、日本3大毒草の毒ウツギです。これに対しても自然観察で、いろいろなことを見ながら子どもたちと話し合っています。

危ないところには、そのときに張ったのでは間に合わないので、朝7時ぐらいからロープを張り、早くからスタッフはちゃんと用意をしております。この子は一生懸命ぶら下がり登っていますが、みんなで、急なところ、危ないところはこうやってロープを使って登っています。そして、お昼を食べて、そのお昼を食べる前に私たちスタッフでこのようにブランコをつくっております。食べ終わった子から順番にブランコに乗って遊んでいます。

これは、水と力比べということで、ビニールの袋1枚なんですけど、この袋の中に水を入れて、持てるかどうか試しています。水の力ってすごい強いんだなってことを子どもたちもわかってくれたみたいです。このように、予算はなくても、葉っぱで鳴らす草笛とか笹舟、それからビニールの袋1枚、登山者の私たちが持っているロープでつくった、ブランコなどで子どもたちはとても楽しんでくれています。

いよいよメインの化石ですね。ここへ下りて行きます。この化石、自分で磨いて、そこに何があるか、どんな化石が出てくるかを見つけてもらうために歯ブラシを用意してもらっています。この子、一生懸命歯ブラシで磨いていますけども、1年たつとこれ苔が生えるんですね、この石の上に。ちょっとわからなくなりますので、歯ブラシで磨いて、そして自分たちで化石を探しています。こんな大きなブラシもあります・・・。

また、ペットボトルを用意してもらい、その中に丹沢のおいしい水を入れて、お土産に持って帰ってもらっています。

最後に、また先ほどの交流センターに戻ってアンケートをいただきます。

10歳の女の子は、川遊びや化石を見られたからよかった、このイベントは楽しいからぜひ続けてほしい。

10歳以下の女の子は、今回自然の大切さを知ったり、いろいろな自然を知ったので、また来たいと思います、私たちも自然を守るべきだと思います。

40代のお母さんは、神奈川県で生まれ育ちましたが、改めて丹沢の価値を考えました。世界に誇れる丹沢のすばらしさをぜひみんなで守っていきたいと思います。30代のお母さんからは、普通の川遊びでは体験できないことを教えていただいた、私たちでこれから丹沢を守っていきたいと思いましたというご感想をいただきました。この親子探検隊、いつもしてよかったなと思うのは、こういう感想をいただく時だと思います。

私たちが届けたい思いを、多分参加してくれた親子はわかってくれたのかなと思って自画自賛をしております。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

（コーディネーター鹿住氏）

有川さん、どうもありがとうございました。

そうしましたら、質問はまた後で、私も聞きたいことが出たんですけれども、聞かせていただくとしまして、次に、日本自然保護協会の茅野さんのほうから赤谷プロジェクトのほうをご紹介いただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

（茅野氏）

ご紹介いただきました茅野でございます。

司会の鹿住さんは鹿が住むという名前だったんですけれども、森と大変関係が深いと。私、父が長野の諏訪市・茅野市あたりの出身でして、それで名字が茅野なんですけれども、茅野（かやの）だったということで、これも昭和30年代、燃料革命が起こるまでは、私たちの父とか祖父の世代というのは、山に入って草を

とったり薪をとったりしていて、そういうカヤ野の野原が広がっていたのかどうか分かりませんが、私の父のところは霧ヶ峰のふもとですので、そういう草原の環境とも関係が深かったんですが、それで、私は赤谷プロジェクトという仕事を日本自然保護協会ですべてしております。この赤谷プロジェクトというのが、準備段階がありまして、今年で丸6年になるんですけども、発足からこのプロジェクトに携わってまして、今日皆さんにパンフレットをお配りしているんですが、パンフレットも後ほど少しご紹介をしたいと思います。

それで、赤谷プロジェクトにおけるNPOと住民の役割ということで、この分科会で何らかの論点を発見していけたらと思っておりますが、まずは組織の紹介をいたしますと、日本自然保護協会は昭和26年にできました。昭和26年というとNPO法ができる37年前です。

今日は、NPOの役割を考えるという機会なんですけど、NPOになりたくてもなれなかったグループ、最初は、昭和24年に国立公園の尾瀬をダム開発から守ろうという、そういう文化人の方々だったり、一部には厚生省とか文化庁の行政の方々もいらしたんですけども、尾瀬保存期成同盟というグループをつくって、2年間国に陳情したりという活動をいたしました。

それが2年たってみて、全国を見てみると、戦後復興の最中で、いろいろなところで自然破壊が起こっているようになったということで、日本自然保護協会という名前に組織の名前を変えて今に至ります。やはり財源であったり、安定した組織基盤がなければいけないということで、NPO法は当時なかったんですけど、その当時の民法制度の中で、昭和35年から財団法人という組織形態を持っています。自然保護団体で財団法人をとったのは、恐らく私どもが初めてだと思います。

会の活動は、全国に今2万4,000人の会員の方々がいらっしゃって、その方々の会費と寄付を主な資源にしています。いろいろな調査をしたり、調査のための助成金や受託事業を受けたりとか、人材育成をするに当たっての経費を参加費という形でいただくとか、そういう事業はしているんですけど、27人の職員を養ったり、基本的な旅費を出したりというようなことをしているのは会員の皆様のご寄付に頼っているという団体です。

それで、私が本日お話しをしたいのは、赤谷プロジェクトという取り組みなん

ですね。日本自然保護協会は発足の当初からずっと奥山の森に関する活動を続けていました。それで、80年代には、今世界遺産になっている白神山地や屋久島、知床、そういったところで林業的な自然林の伐採と自然保護の両立ができないところでは、もうそこを保護区にしたほうがいいのではないかとということで、そこが林野庁の保護区になって、その後世界遺産になってという経緯をその3カ所はたどっているんですけども、その後もいろいろなところで、今活動しているのはこの赤谷とか、それから小笠原、奄美大島、沖縄の北部のやんばる、北海道、こういったところで森を大規模に守るという仕組みをつくるにはどうしたらいいかということをやまだに模索をしています。

それで、赤谷プロジェクトというのは、そういった保護区をつくって終わりということではなくて、地域社会の中に森がある意味というのを自然保護の観点からも、はっきりその地域あるいは日本社会にとってプラスに見てもらえるというような保護活動というのができないかということで構想をしてきたところなんです。今日はここ神奈川県ですので、赤谷の森といっても、丹沢と違って皆さん具体的なイメージがつかないと思います。まずこの赤谷プロジェクトというのは正式名称を三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画といいまして、大変長い名前なんです。通称で赤谷プロジェクトと呼んでいます。

三国山地とは谷川岳から西に連なる山々です。新潟県との県境にある、一番西の端は平標山という1,800mちょっとの山がありますけれど、その集水域を流れる川を赤谷川といいます。これは利根川の上流域の一つなんです。月夜野というところで水上から来る利根川の本流と合流をします。そこで生物多様性の復元をしようという取り組みなんです。10キロ四方の国有林、これは山手線の内側の面積が大体5,000haから6,000haと言われていきますので、その1.5倍ぐらいというイメージをしていただきたいと思います。その国有林を地域住民、林野行政、それから自然保護協会で共同管理という枠組みをつくりました。その上で、生物多様性、自然を再生していこうという取り組みなんです。

これが左側が東京と群馬県、神奈川県相模原市はこのあたりですね。群馬県の一番新潟県に近いところ、国境を越えると雪国だったという世界の、国境を越える手前のところの1万ヘクタールの森というのが赤谷の森というふうに呼んでいるところなんです。それで、ここは地域の中で国有林の比率というのがとても

高く、群馬県のみなかみ町というところなんですけれども、町の面積の半分以上が国有林というそういうところなんです。国有林を核にして、地域住民の参加も得ながら、民有林への波及効果もねらって、まずは集水域全体を守る、うまく活用していくという、こういうねらいで国有林とタッグを組んでいます。

このプロジェクトは、梓組み自体が全国で初めてなんですけれども、この3つの組織がメンバーになっています。1つは、地域住民の参加が何より大事だろうということで、赤谷プロジェクト地域協議会というグループをこのプロジェクトの発足にあわせてつくっていただきました。それから、右下のほうに行きますと、林野庁の関東森林管理局という前橋にある出先機関ですね、この神奈川県も所管をしています。神奈川県ですと、東京神奈川森林管理署という森林管理署があるんですが、林野庁の関東森林管理局の中に利根沼田森林管理署という組織があって、そこの管内に赤谷の森は含まれると。それから日本自然保護協会もこのメンバーの中に入っています。

それで、どうして赤谷の森なのかと。なぜその赤谷の森でこういう特別なことを始めようとしたのかということをご紹介しますと、実はここは、私たち自然保護協会にとっては、20年前は自然保護問題の現場だったんです。80年代の後半なんですけれども、ちょうどリゾート法ができた直後です。リゾート法の流れに乗って、この赤谷の森でもスキー場をつくろうという計画がありました。これは、すぐ隣町は新潟県の湯沢町で、湯沢は大規模なスキー場がたくさんあります。そこと県境を越えてゴンドラで結べないかという構想もあったそうで、かなり大規模な計画であったというふうに聞いています。それから、もう一つが、まだ水需要がこれも大きく評価をされていた時代で、川古ダムという新しい建設省の直轄のダムがここに企画をされていました。

この2つの大規模計画に対して、まず地域住民の方々が、住民運動を立ち上げました。ここは観光業と農業をメインの産業にしているところです。それから林業ですね。主に観光業をされている方は、この地域の温泉資源を頼って生活を成り立たせているんですけれども、森が変わることで温泉に影響が出るんじゃないかということをご心配されました。その後、何とかこの地域を守ることができないかということで、東京にある私たちのところにSOSをくださって、一緒に調査をしないかということを持ちかけたのがそもそもの経緯で、今から18年前

の出来事なんです。

それで10年間、いろいろな調査研究をした結果、これはもう社会の変化なんだと思うんですが、平成12年にこのスキー場の計画と川古ダムの計画というのは、相次いで中止になったんです。ただ、地域の方々は、これが中止になったのはよかったけれど、本当に建設省がダムを中止にしてしまったら、工事事務所も全員引き上げてしまって、地域には何もプラスが残らなかった。スキー場も恐らくそんなところなんですね。何とかここでモデル的な取り組みをできないだろうかという、そういう相談を3年ほど続けました。それで、2004年に赤谷プロジェクトが発足をしたという経緯です。

それで、赤谷プロジェクトというのは当時はまだ誰もやったことがない仕事であったわけです。自然再生推進法という法律は2002年にできていたんですけども、まだその具体的な枠組みというものは、環境省のほうでも釧路湿原とかそういうところでしかモデル的に行われていなくて、どんなことをできるのかというところから会合を持ち始めました。丸1年かけて、協定という形で自然保護協会と林野庁とが契約を交わすという形でこのプロジェクトが発足をしています。ちなみにこのプロジェクト自体は、自然再生推進法の枠組みには基づいていません。

協定についてご紹介します。字ばかりで申しわけないんですが、まず何をするかということで、生物多様性を科学的根拠をもって確保しましょうと。それともう一つ、自然を損なわぬように活動していく地域づくりを進めましょうと。それを地域住民と関東森林管理局と自然保護協会と三者協力で行っていきましょうという仕組みなんです。

いろいろなところでこの仕組みは新しいぞという評価をいただいたんですが、国有林というのはこれまで、今もそのほとんどがそうなんですけれども、国民から管理を委託されているのは林野庁という組織で、彼らが計画もつくり、実行するという形で管理を進めていたというのが実態です。この赤谷プロジェクトは、国有林の計画制度にその活動の成果というのを反映させるという、ここを握りました。それは、赤谷プロジェクトがまず先にプランの構想をつくり、それを国有林が計画、自分たちが法律で定めなければいけない計画に反映させるというものです。5年に1度その国有林の計画自体が変わる機会があるんですが、それにあわせてプロジェクトが具体的な構想というのを5年に1度まとめて、それを計画に

反映させるというそういう仕組みをまずとっています。

それから、やはり息の長い活動期間が大事ですので、基本的には10年を節目として協定を更新していきましようという仕組みをとっています。これも新しくて、国有林の計画は5年に1度改訂されるんですよね。ということは、5年を超える協定というのはそれまで進めていなかったそうなんです。それをを超える基本単位をその協定の期間としたという、これも新しいことでありました。

それで、では、具体的にどんなことをやっているのかということをご紹介しますが、お手持ちのパンフレットを開いていただくと、自然再生の仕事からいろいろな哺乳動物、猛禽類の調査から環境教育活動まで、さまざまな調査研究を行っています。

具体例をご紹介しますが、これは11月の下旬に撮影をした赤谷の森の様子です。ここは人工林が1万ヘクタールのうち3割の面積で入っています。その3割の面積の人工林を、一部自然再生のために人工林を取り除いて自然林に戻したいというプランを立てています。濃い緑色になっているところは杉林なんですけど、この杉林とカラマツの林が中心なんですけれど、自然林に戻すという実験をしています。例えば、人工林伐採の実験ということで、どういう伐採方法が自然林に戻りやすいのかと。ここでは、まず当面の間、自然林を植えるということを考えてなくて、自然の回復力がどれだけあるのかということをもとに科学的に測ることが大事だろうという立場に立ってまして、2006年に伐採をしたのが左のカラマツ林なんですけど、毎年毎年何が出てくるのかということをもとに、昨年一昨年、今年もその予定なんですけども、毎年調査をしています。カラマツと一緒に伐採されたもともと入っていた広葉樹、自然林ですね、それがかなりの数、萌芽更新で再生をしています。20年ほどこれを見ながら、きちんとした森林に戻っていくのかということをもとにモニターしていく必要があると思っています、それには研究者の方々が大勢参加をしていただいています。

それから、ちょっと森の話と外れるんですが、川の上流というのも森の大事な環境なのでお話し申し上げますと、ここでは土砂をためる治山ダムというのが何十基か入っているんですけども、この赤谷プロジェクトで、自然再生のために昭和30年代につくられたダムの中央部を撤去することにしました。今年または来年にこれを着手して、実際に撤去ということを行ってみるということにしていま

す。こういう森や溪流の復元を行っていかうというプランなんですけれども、科学的な根拠が大事なので、専門家の方々プラス市民のサポーターの方々に科学的知見を蓄積しています。

赤谷プロジェクトというものは、単なる自然再生事業でもないし、単なる調査研究、モニタリングの仕事だけでもありません。地域づくりということもそこに絡むんだけど、従来型の地域振興のような枠組みでもありません。では、一体何なのだというと、クマもいたり、クマタカがいたり、ブナの自然林があったり、林業もここでも引き続きやられています。うまくゾーニングをしながら、1万ヘクタールという極めて広大な森を効果的に管理したいと。その上で、自然環境の基礎体力という意味で、生物多様性をここで向上させたいというそういうねらいを持っているものです。

これまでは、猛禽類の保全であったりとか、イヌワシとかクマタカですね、それから哺乳類の保全であったり、あるいは水源に関する取り組みとか、人工林を整備していきましょう、あるいは森林を自然林に戻していきましょう、個別にはいろいろなところでパイロット事業というものが全国でやられていたと思いますが、個々ばらばらに行われているという状況があったと思います。そうではなくて、ここは市民や行政が関与する形でいろいろやられているその事業というものを重ねて、順応的な森の管理に生かそうという取り組みなんです。

三者が加わっていますという話をしましたが、三者、地元とNGOと行政というこの三者だけでは取り組みは成立しませんので、少し敷衍してモデルにしてみました。まず核になるメンバーとして地域と土地管理者としての行政機関です。ここでは土地管理者は林野庁です。それから、科学的なデータに基づいて修復をしていくコーディネートをする機関として私たちNGOが参画をしています。こういう核になる構造に、市民のサポーターの方々に登録制度で設けています。それから、企業の方々が、CSR活動の一環で今4社ほどこのプロジェクトにかかわっています。こういう構造が総合的な流域の管理、森林の管理の取り組みを可能にさせています。

今日はNPOの役割について考えるということなので、赤谷の森においてどんな市民、住民の参加の形があるのかということをお示しすると、4点ほどあると思います。1つは、全国規模のNGOである日本自然保護協会が中核の団体として、

私が総合事務局をしているいろいろな会議の司会をしたりして、参加をしています。それから、地域協議会を通じて住民の方々、森のすぐそばに住んでいる方々が参加をされています。3つ目は、サポーター制度というのがあるんですが、関東一円の市民の方々が毎月活動に参加をされています。それから、東京、大阪、そういった企業の方々がCSRを通じて参加をされています。

さらに、テーマごとに、専門家の方々が単なる研究をするというのではなくて、森の生物多様性を向上させるという目的を持って、アクターとして専門家が参加をしています。客観的な立場だけではなくて、実際の森の管理にかかわっていますので、そういう形での参加です。このような多面的な参加という形をもって、赤谷の森の生態系管理を実施しているというのが赤谷プロジェクトにおける参加です。

赤谷プロジェクトでは協働という言葉を使っています。協働がどうやって成立するかというイメージなんですけれども、私は総合事務局をしていますので、このことは常に肝に銘じながら考えています。今までいろいろな形でパートナーシップとかコラボレーションを進めようということがあったと思います。それぞれプロジェクト型の仕事ですので、参加者がお互い課題を持ち寄ってプロジェクトを成立させようと思うわけですが、大事なことはそれぞれが課題を持ち寄るだけでなく、そのお互いの課題というのを積極的に重ねて、そのプロジェクトあるいは森の共通の課題なんだという形で、事業のデザインを考えていくということが大事です。こうすることで、自己満足に終わらないし、あるいは生物多様性とか地域の持続性を考えるということはとても一者ではやり切れない、そういった難しい課題に対処していくには、こうやって課題を重ねてお互いの力を合わさざるを得ないところがあると思います。

これを理念的な形にして、神奈川でも今課題になっていると思うんですが、総合的な流域管理の行動計画というものを、計画をするだけでなく実現するというモードが必要です。赤谷では今それが実現しかかっているということで事例を紹介したわけなんですけれども、神奈川でも多面的な事例が生まれていくことを期待をして、赤谷プロジェクトにもそれを反映させながら、お互い高め合っていければと思っています。

ちょっと長くなりましたが、以上です。ありがとうございました。（拍手）

(コーディネーター鹿住氏)

茅野さん、どうもありがとうございました。

そうしましたら、今度、私コーディネーターなんですけれども、事例報告させていただきたいと思います。

お手元に、リーフレットもありますので、後ほど見ていただければと思います。

JUON NETWORKの名前が、樹木の「樹」に恩人の「恩」と書いています。何かホラー映画みたいなんですけれども、木のことを何となくやっているなというふう
に思うかと思いますが、実はちょうど10年たって、11年目に入っておりまして、9
8年に、大学生協という大学にある生活協同組合、大学の学生が一番多いんですけ
れども、先生でしたり大学の職員なんかで構成されているのが大学生協で、大学
の数自体は全国に700ぐらいあると思うんですけれども、全国220ぐらいの大学と
か、最近では高等専門学校なんかにもできている、食堂を経営していたり、書籍、
本を販売していたりとか、学生の生活を総合的にサポートしているのが大学生協
ですけれども、そこが呼びかけをしてできた組織です。

基本的には、都市といわゆる過疎地域ですね、農山漁村なんて言いますけれど
も、を結んで、主に過疎化ということが起している問題について解決していきま
しょうということで、そこにも地方文化の発掘と普及と書いてありますけれども、
地域に残っている伝統や芸能が、若者が出ていっちゃって、よくみこしの担ぎ手
がいないとかという話聞くとするんですけれども、そういった地域の文化とかいう
ものを何とかできないかということや、あるいはここ4年ぐらいなんですけれど
も、農家も過疎高齢化で大変だということで、農家のお手伝い、具体的には山梨
のブドウ農家のお手伝いをしているんですけれども、そういった援農、農業を援
助する援農なんて言いますけれども、あるいは今日これから一番メインでお話しす
る日本の森林を守ること。日本の森林を守る人たちが減ってきているということ
で、川下の都市住民が川上の山のほうに行き、森の手入れを手伝うといういわ
ゆる森林ボランティア活動ですね、そういうことを全国12カ所ぐらいで活動して
おります。

つまり、過疎化ということが起こしている問題について取り組もうということ

なんですけれども、考えていることは、都市と農山漁村の、日本国内の身近な地域での、物だったり人だっりの循環をつくり直そうと。今、食べ物や木などのいろいろなものが、海外から入ってくる。それは、大量にエネルギーをかけて国内に持ってくるよりも、近くの農山村から持ってきたほうがエネルギー的にもいいでしょうし、環境的にもよく地産地消なんて言いますけれども、そういった国内での循環をつくり直したいというようなことで活動しております。一番は今申し上げたような活動をしておりまして、都市と山村を結ぶ人材のコーディネーター、人材の養成ということで、エコサーバー検定というような検定制度も設けてやっております。

組織の規模なんですけれども、日本自然保護協会は大変大きいんですけれども、私どもは会員が全国で500人ぐらいで、団体が100団体ぐらい、予算規模というのが2,000万円ということで、これは多分NPO法人が先ほど3万6,000団体ぐらいあると言いましたけれども、その中では真ん中よりちょっと上ぐらいの予算規模の団体ではないかなというふうに思います。理事は全国20人ぐらいいるんですけれども、私のようなフルタイムの職員が3人いて、非常勤の職員として学生のアルバイトが1人いて、あとはインターンとかボランティアの人たちによって支えられています。

事務所は東京にしかないんですけれども、全国で理事を中心に世話人会という形で、これは皆さん手弁当で、お金は全くもらっていないでボランティアでやっているんですけれども、全国で活動を進めていますので、その地域ごとに活動が進むように世話人会という組織があります。北海道東北というのを1つの単位、関東甲信越を1つの単位というふうに、北海道と東北はととも1つにはまとめられないんですけれども、北海道はそんなに会員が多くはありませんので、仙台を中心に活動を進めています。ほかに、東海北陸、関西中国、四国、九州と6個の地域ブロックということで活動を進めているという、これが組織の紹介です。

一番力を入れているのが森林の保全活動なんですけれども、世の中には余り知られていないんですけれども、森林保全活動をしている中で私どもが割と知られているのは、間伐材、国産材を使った割りばしを推進している団体であるということで知っていただいているかなと思います。年末の朝日新聞でも大変大きく取り上げていただきまして、ちょうど10年の区切りで大変喜んではいるんですけれ

ども、広く知ってもらえるようになってきたかなというふうに思っています。

そのほかに、森林環境教育プログラムなんて書いてありますけれども、森林の楽校（もりのがっこう）を、今年度、2008年度は全国12カ所で実施をさせていただいています。そのほかに、森林の楽校というのは割と森林ボランティア活動の入り口の活動なんですね。その入り口なものですから、たくさんの広く多くの方に参加していただいているんですけれども、実際に継続して森林のボランティア活動をする担い手を育てようと。特に、大学生協という若い人たちが多い組織から生まれた組織なので、森林ボランティア活動は割と50代、60代の方が多いですけれども、青年層が弱いということで、青年リーダー養成講座という18歳から40歳までを対象としているんですけれども、そういった活動を東京では10年間、関西では2年間やってきていまして、全部で今200人ぐらいの、毎年20人ぐらい東京だと受講しますので、これまで200人ぐらい卒業生が出てきています。中には森林組合で働くようになったメンバーもいるんですけれども、そんなこともやっています。

その卒業生たちをヤングジュオンと言っているんですけれども、月に1回とか2回森づくりの活動とか、地域の方々と一緒に料理つくるとか、地域の方の聞き書きをするとか、そういうような活動を東京では奥多摩、関西では京都とか兵庫で行っています。

ほかにも、海外の木質バイオマスとか自然エネルギーを見に行くようなツアーをやったり、最近ではやはり企業の、先ほどの日本自然保護協会でもCSRという言葉が出ていましたけれども、企業も、ちょっとこういう経済状況になったんで今後どういうふうになるかわかりませんが、企業もやはり森づくりを社会貢献活動としてしたいということが結構増えてきておりまして、そういうことのお手伝いとか、あるいは生協ですね。例えばコープとうきょうという生協ではレジ袋削減のため、レジ袋を使う人から5円いただいているのですが、その基金を環境のことに当てていこうという中で、東京の山、水源を守ろうということで、私たちの団体を通じて、大自然塾という奥多摩の活動を支援していただいたりしております。地域生協、一般の市民生協の活動のお手伝いなんかもしております。

これから割り箸の話と、今日は森林の楽校という話を少しさせていただきたいというふうに思います。私どもが10年間やってきている取り組みなんですけれど

も、なぜ割り箸をやっているか？もともと私どもの組織が、なぜ大学生協が呼びかけをしてこういう都市と山村を結ぶという団体をつくったかということで考えますと、大学生協が学生用の合宿施設に、過疎地域の廃校を、再生したということで山村の方と知り合ったということが一つと、もう一つが、阪神淡路大震災、もう14年たちますけれども、そのときに仮設学生寮というのを大学生協で建てたときに、四国の徳島の林業関係の方々が間伐材でつくったミニハウスという住宅を学生用に提供していただいて、学生が仮設学生寮としてそこに住んで、1年間大学に通ったということがあったんです。間伐材のミニハウスというのをちょうど開発していたということで使っていたらこうということだったんですけども、それは徳島の方々はやはり森林、日本の森を守るために何とか間伐材を使っていたらこうということで商品化していたところで、震災を通じて大学生協と出会ったんですね。

その後、大学生に日本の木を使ってほしいというときに、例えば新入生が大学に入学したときに一人暮らしを始めるときに、テーブルとか買いますよね。そういう間伐材でつくったミニテーブルみたいなもの、ちゃぶ台みたいなものも販売したりということもあったんですけども、大学生協というのはほかの生協と違って食堂というものを持っているんですね。そのときに、では、割り箸を使っているじゃないかと。それを、国産の間伐材の割り箸にしたらいんじゃないかというところから実は生まれたので、大学生協と関係を持っている団体ならではの特徴だと思うんですけども、それで割り箸を始めたというわけです。

この割り箸の意義としては、日本の森林を守るために国産材・間伐材を使うということが1つ目。あるいは、障害者の仕事づくりということで、障害者の施設で製造をしております。後で紹介しますが、今3カ所の施設で製造しています。それと大学の食堂の油物とか汚れ、洗剤ということで、排水の基準がちょっと高いということもあって、それを減らすためには少しでも洗い物を減らしたほうが良いというようなこともあって、この3つの理念で始めました。

今、日本で使われている割りはほとんどが外国から来ているんですけども、国内のもので、つくっている人の顔が完全に見えていますので、そういう意味では口に入れるというものの安全性という意味では安全だというふうに言えますし、箸だけに都市と山村を結ぶかけはし（箸）と。そんなふうに言っております。

あと、使った後は、製紙工場に送っているところもあるんですけども、パーティクルボードって皆さんわかりますか。木のくずを圧縮したような、よくカラーボックスとかテレビの台とか、こういうやつも多分表面をはがすと中に木のくず圧縮したようなものが板になっていることがあるんですけども、そういったものの工場に送っているところが多いです。先ほどの、なぜ割り箸を私どもがやっているかというところで、その大学食堂のゼロエミッション化という、うちの理事の佐藤敬一東京農工大准教授の研究の中から、日本の林業を活かすとか、こういうごみをゼロにしようという構想の中から出てきたものです。

先ほどの徳島の森林関係者、林業関係者が仮設学生寮を提供していただいたということを申しあげましたけれども、そのことがあって最初は徳島で製造を始めております。最初は森林組合のほうで製造してしまして、最終的な加工段階だけ障害者施設でやっていたんですけども、今ではすべてセルフ箸蔵という障害者施設で行っています。箸をつくっているから箸蔵ではなくて、地名がたまたま箸蔵だったという、非常に偶然なんですけれども、弘法大師が箸を供養するために箸蔵寺というお寺をつくったんですけども、その地域にあるものですから箸蔵で、これは運命だったんだなんてよく言うんですけども、セルフ箸蔵という知的障害者の人たちが通って働く場所、いわゆる通所施設で製造をしております。利用しているのは大学の食堂が中心なんですけども、ほかにも学園祭とか市民祭りで使っていただいたりしています。

そこから、最初はなかなか間伐材でつくっているということがあって、年輪の入り具合の関係で折れやすかったり、あとやはり国産ということで高いんですね。今日本の割り箸というのはほとんど中国から来ているんですけども、それは安いから中国から来ているわけですね。国産だと高いということで、なかなか使ってもらうところがなかったんですけども、だんだん使うところが増えてきております。その関係で製造拠点も広がってきておまして、今埼玉の、江南愛の家というこれは重度の知的障害者の入所施設、生活している施設なんですけども、こちらで製造していたり、群馬の桐生というところですね、林業が盛んな地域ですけれども、そこのエルシーヌ藤ヶ丘というところで製造しています。

この画面は、徳島のセルフ箸蔵という箸工場が右側になっていますけれども、ここは40人の施設で、35人ぐらいの人が割り箸の製造に携わっていて、ほとんど

が最後に選別をするようなところにかかわっているんですけども、そういった仕事づくりということをしています。これを使っている大学の食堂では、その意義を訴えるようなことをパネルとかで紹介したり、あるいはこれがパーティクルボードでつくった回収ボックスなんですけど、リサイクルするというようなそういう取り組みを、大学生の環境教育とでもいいでしょうか、そんなことを担っています。

使っている量というのが、最初98年度、JUON NETWORKができた年からやって、9月から初年度ですけども、大体200万膳ぐらいだったものが、昨年度2007年度で大体1,000万膳ぐらいということで、利用が伸びてきています。ただ、皆さん1年間に日本で使われている割り箸の量をご存じでしょうか。250億膳です。人口が1億2,000万ですよ。とすると、1人大体200膳ぐらい使っているという。少し多過ぎるかなという感じもしますけれども、そのうちの97%が中国産。輸入物が98%なんですけども、その99%が中国産ということになってきまして、まだまだ日本にたくさん材料はあるんですけども、安いというだけで海外から入ってくるという状況になっています。

割り箸は、よく使い捨てでもったいないとかという議論があるんですけども、割り箸をつくる場合に大体今日本の場合、中国の場合だとちょっとつくり方が違ったりするんですけども、木は断面で見ると丸くなっておりますけれども、それを柱とか板を作るため、四角く製材するんですよ。その周りに半月状のものが4つできますけど、これを端材とか背板というんですけども、これを捨てるのがもったいないということから生まれたのがそもそも割り箸ということで、材の有効活用なんていう意味もあって、今もそういったような形で製造しています。

『割り箸が地域と地球を救う』という本を出したので、もし関心ある方は読んでみてください。

それから、森づくりの、先ほど言った森林の楽校ですね。これは学習・体験・交流ということで、地域の方々と交流するとかということが一つ特徴になっております。森林ボランティアの入り口の活動だと思ってください。私どもは、先ほどの日本自然保護協会と同じように、全国というか、東京に事務所がある団体ですので、各地域でやるに当たっては必ず地域の受け入れをしてくれる団体というのがあるんですね。

それが、協力団体というところに書いてあるんですけども、秋田は白神山地でやっています、白神ぶなっこ教室という廃校を活用した子ども向けの自然学校をやっているところなんですけれども、そういったところに協力していただいたり、あるいは群馬の水上でもやっているんですけども、これは国有林ですね。国有林を分収育林の制度で、三菱UFJ環境財団というところがやっています。そこと一緒にやったりとか、あるいは行政、埼玉だと神川町の役場と、あるいは森林組合と協力したり、あと佐渡ヶ島でトキ野生復帰プロジェクトというのに協力しているんですけども、新潟大学と一緒にやったり、富山県だと地元のNPO、グリーンアーツコミュニティー利賀というんですけど、そういったところとやったりしております。

あとは、岐阜の地元のNPOとか、あと8番の兵庫は地域の自治会ですね、自治会の方々と一緒にやったり。あるいは四国では、徳島県ですね、行政。あるいは香川だと林業研究会という山主、林業をやっている方々と一緒にやったり、11番目は社団法人の四万十学舎という、廃校を活用してカヌーの体験とかそういうふうなことをやっている団体や、長崎ですと地元のNPOというか、法人格を持っているわけではありませんけれども、NPOの団体とやっています。ということで、時間になってきましたので、こういう感じで写真をちょっとお見せします。

先ほどの割り箸の話は、実はまだまだ量が足りないということで、今、福島とか広島とかでも新たに障害者施設のほうでやっというふうに動いているんですけども、実は先日相模原の方とも知り合いました、ぜひ相模原でもやりたいというお話をちょうどいただいたりしているところです。やはりその地域に、まだまだ大きな取り組みではないんですけども、経済的な意味も含めて地域のほうに何か持っていくということも大切だなというふうに考えております。

四万十川のところで炭を焼いたりとか、こういう年輩の地元の林業家の方と交流するとかということも一つの役割ですね。ということで、ちょっと時間がオーバーしてしまいましたけれども、こんなところでしょうか。

あと、NPOの役割や活性化する仕組みについてはディスカッションの中で話をさせていただきたいと思います。

どうも、ありがとうございました。（拍手）

それでは皆さん、質問用紙のほうにご質問あるいはご意見、先ほど申し上げた

ようなNPOに関しての、NPOの役割とかNPOを活性化させる仕組みとかについてのご提案などを用紙に書いていただければと思います。この間に回収をさせていただきたいというふうに思います。

では、ここからディスカッションのほうに入っていきたいと思うんですけども、まず、先ほど私も事例を聞いていて、もう少し詳しく聞かせてほしいなというところがあったので、有川さんのほうにご質問をさせていただきたいんですけども、まずこのリーフレットを見させていただくと、会員数810名ということで大きな団体だなというふうに思ったんですけども、もともと多分山を登るということから始まった会じゃないかなと思うんですが、ごみの回収の活動はどのような経緯で始まったり、あるいはどういう人たち、どういうメンバーで今実際に会の中で動かれているとか、そういうことを教えていただければと思うんですけども。

(有川氏)

では、お答えいたします。みろく山の会というのは27年前の4月にできまして、もうすぐ28年目に入ろうとしている会です。NPOになってちょうど11年目に入りました。こういう山岳会といたしましては、NPOになったのが全国で初めての山の会でした。

ごみ拾いといいますのは、国体が終わりました、丹沢の山はその当時のごみがいっぱいだったそうです。といいますのは、今は皆さん丹沢歩いても、どこかほかの山を歩いても、登山者のマナー大変よくなってきているんですよ。啓蒙活動が盛んです。今は余りごみが落ちているとかそういうことはございません。皆さん、ごみは家から家までということで持ち帰っておりますね。ところが、その当時は、尾瀬もそうですけども、お弁当持っていってお弁当のかすはベンチのこの下へ捨てるとか、そういう時代だったそうです。カラスがそれを突きに来るとかそういう時代だったそうですが、丹沢も同じようです。

丹沢も、企業の協力で、こういうネットになってスイングするかごがありましたよね、ごみのかご。ああいうかごが山の上に置かれたそうです。ところが、山の上は車走っていませんよね。ですから、もう瞬く間にそれがあふれて、これどうしたらいいんだということになりましたら、燃せるものは燃す、ところが燃せ

ないものは穴を掘って埋めるか、先ほどいっぱいごみがありました新大日ですが、あそこは私の背より高い150センチ以上のスズタケが生えていたそうです。その中に放り込んだんですね、捨てたんです。そうしましたら、最初ごみは増えませんでした、今度スズタケが枯れましたので、あんなふうにごみが出てきちゃったんですね。そういう時代でした。みろく山の会は、創立する前、創立が4月10日なんです、その前に第1回の清掃登山を行っています。そのように、もうずっと創立以前からごみ拾いをしてきたという会です。

(コーディネーター鹿住氏)

山が好きだから、その好きなところをきれいにしたいというところから始まったんでしょうか。

(有川氏)

はい、そうです。ホームグラウンドですので。大切なホームグラウンドは、スポーツマンはみんな大事にしますものね。それと同じ心理です。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございました。

それでは、茅野さん、赤谷プロジェクト、いろいろな協力関係等教えていただいたんですけども、今具体的に活動の頻度とか、どういうペースで行っているのでしょうか。先ほど企業もという話もありましたけど、日常的になるんでしょうか。具体的な活動の頻度とかその辺を教えてください。

(茅野氏)

そうですね。関係者、プロジェクトのメンバーが毎日のように森に入っていると思います。関係するメンバー、私どものスタッフ、また林野庁は赤谷プロジェクトのために組織を1つつくりましたし、地元の方々も地域協議会の会員が約60人、登録しているサポーターも約50人います。研究者の方々も30人ぐらいかかわっているので、だれかがイヌワシの観察に行くとか、サルモニタリングに行くとか、伐採の作業に入るとか、そういう意味からすると四六時中現場で活動が行

われているという状態です。ですから、東京から私たちが行ったときにも必ず森の中でメンバーの方に会うし、地元にも宿泊者数という意味でも結構な数が泊まっています。

(コーディネーター鹿住氏)

そういう意味で、かなり地域にもお金が落ちているというようなところがありそうですね。

(茅野氏)

そうですね。何万人というわけにはいかないんですけど、それでも、やってよかったなというふうに思われるところまでは何とかつづけているんじゃないかなと思っています。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございます。

そうしましたら、今日のテーマの一つであるNPOの役割についてということについておうかがいします。NPOと、地域に住んでいる方々との関係というのがあると思うんですけども、その地域の方々にNPOとして何かしら発揮できているような役割、有川さんの場合はもしかしたら山ですと、住んでいる方というのがその地域にはいないようなことになってしまうかもしれないんですけども、茅野さん、その地域の方に対して日本自然保護協会とか、いわゆるよそ者というふうに言ってもいいかもしれないんですけども、その人たちに果たせている役割というのはいかがですか。

(茅野氏)

そうですね。パンフレットをごらんいただくと、赤谷プロジェクトがいろいろなことやっているなというふうにわかると思うんですね。中を見ると、教育活動もあるし、森林の再生というものもあれば、いろいろな生き物のモニタリング・調査というものもあるし、これはいろいろなかわりのチャンスをサポーターの方々や地域住民の方々に持ってもらいたいのです。何か1つに参加するというこ

とで、その森全体のプラスに関与しているというスキームが欲しくて、あえてシングルイシュー型の活動ではなくて、総合的なものにしようということをやっているんですね。

やはりこの5年間進めてみて痛感しているのは、地域住民の方々だけでなく、これ行政機関の方々に対してもそうなんですけれど、やはりともにやってみるといふこと、協働をするといふことの教育効果というものが極めて大きいといふふうに思います。私たちも、協働してある森の管理に契約をしてかかわるといふことは自然保護協会としては初めてなのです。運動団体が森の管理に責任を持つといふことは、自分たち自体も学びながらやっていかなければいけないわけですね。

行政の方々も、四六時中他者につき合っていかなければいけないというのは、当然その行政内部の中ではあると思うんですが、こうやって市民と毎日一緒に何かをするといふことはなかなかできない経験だと思うんです。その中での教育効果というものもある。それから、地域住民の方々にとってすれば、森の魅力というものを人がこんなふうに見ているのかとか、そういう意味で自分たちの奥山の森の価値というものを再発見します。実は、4日前に成果報告会とをやってきましたんですけど、いろいろな成果が出てくるということで、地域の方々がそれにどう答えて、どう自分たちが主体的に何かプログラムを考えて進めていったらいいだろうかといふことを考えているということで、やはり協働の教育効果というのは私は大きいなと思いました。これは多分、型どおりの、形式的な、だれかがおぜん立てをしてといふところでは深まらないものなんだろうなと思っています。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございます。

今、地域住民との関係、あるいは行政のことも含めて、行政とも多分違う、多様な主体というんでしょうか、協働すると、教育的な学びの効果が深いというようなお話だったと思うんですけれども、有川さん、特に地域住民とかということだけでなく結構なんですけれども、その辺のNPOの役割というんでしょうか、お感じになっていることがあったらお願いします。

(有川氏)

はっきり申し上げますと、NPOにはお金がないんですよね。今日ご参加になっているNPOの方々もそうではないでしょうか。それを補ってもらうのは、例えば企業や行政、例えば先ほどスライドでお目につけてみただけでも、私どもみろく山の会で登山道の整備をしようというそういうとき、例えばあとはごみ拾いをしようというときに、最初は山の上からごみは全部背負って下ろしていたんです。ところが、あれほど大きな、もう2m以上の鉄の棒とかそういうのは背負っておろすといっても大変な作業です。そこで、ヘリをお願いするというときには、やはりヘリ1台のお金は大変かかりますよね。それはどうしたらいいか。どこかの企業が助成作業をしているときには、すぐそれに飛びついて応募してみるとか、それから県のほうで協力をしてくれないかとか、そういったアプローチを一生懸命いたしました。例えば県が、作業で山に入り、荷物をヘリで持ち上げたときに、その帰りのヘリ、帰りは何も積んでないですよ、ヘリは。そういうのを使わせていただくとかね。そうすると、大変安いお金でできますよね。県もそれほど負担がかからなくて済むわけです。そういうので協力して働く、そういうことをやらせていただきました。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございます。

今、お金の話がでましたが、お金がないということで、私どもも2,000万円という予算規模で、3人雇っています。いったい給料を幾らもらっているんだというようなことにお感じになったかと思うんですけど、まさにそういう意味では非常に苦勞している部分です。今NPOの役割についてというお話の中から、NPOを活性化させる仕組みというところへ入ろうとしているんですけども、その活性化させる仕組みという中で、お金の支援というのが一つあります。

例えば、今回のこの神奈川のプランの県民会議の中で、NPOの支援について考えるという専門委員会がつけられているそうです。その中で、NPOに対して助成金を出すという、そういう仕組みというのものもあるというふうに聞いております。皆さんの中で、その助成を受けているとか、受けようとしている団体はありますか。実は、有川さんから先程、その助成を今年から受けていると聞きました。

助成金を受けるということで、そういう意味での、行政からお金をいただくとか、そういう資金のことについてお考えになっていることとかがありましたらお願いしたいんですけども、いかがでしょうか。例えば、今回のこの神奈川のプランの中で、県民会議という中で、NPOの支援について考えるという専門委員会がつくられているそうです。その中で、NPOに対して助成金を出すという、そういう仕組みというのものもあるというふうに聞いております。この中でももしかしたらその助成を受けているとか、受けようとしている団体ありますか。実は、有川さんとちょっとお話ししていたら、その助成を今年から受けていると聞きました。助成金を受けるということで、そういう意味での、行政からお金をいただくとか、そういう資源のことについてお考えになっていることとかがありましたらお願いしたいんですけども、いかがでしょうか。

(茅野氏)

自然保護協会自体は、JUON NETWORKさんが2,000万ぐらいとおっしゃっていましたが、日本自然保護協会は2億円ちょっとぐらい、大体10倍ぐらいというところです。これは、会員の方々の寄付が1億ちょっとありますので、それが極めて大きいです。ただ、こういうプロジェクト型の仕事をするときには、なかなか私たちの人件費以上に会員の方々の会費というのを投入するということはできません。プロジェクトを運営していくときに大事だと思っているのは、できるだけいろいろなところから少額でもいいのでお金を取ってこようというふうに思っています。

そういった場合に、30社の企業とやって、そこから30万円ずつもらって1,000万というのは効率が悪過ぎるし、プロジェクトを安売りしていることになるので、研究助成や活動助成は、研究者グループや地域協議会に受け入れの団体になってもらったり、企業からいただくときは上限は毎年4社とに絞っています。これが5社になったら、ちょっと担当者としてはつき合い切れないという思いを持っていて、1社とできるだけ深く長くつき合いたいんですね。その意味で広告とか、株主報告書などにも写真や活動報告というのを使っていただいていますし、これは逃げられないぞという状況をこちらからつくるということはとても大事だと思っています。プロジェクトの特徴としてはそういうところです。

(コーディネーター鹿住氏)

行政からのお金というのはどうですか。

(茅野氏)

行政からは調査委託という形で、たくさんの研究者の活動の窓口役にもなっています。プロジェクト自体の予算規模としては、丹沢プロジェクトほど大きくないんです。何億もかけているわけではなくて、全体で数千万ぐらいだと思います。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございます。

有川さん、いかがでしょうか、そのお金の部分、先ほども言っていたいただきましたが。

(有川氏)

先ほどスライドにありましたように、登山道の補修と整備をしております。そのときに使用します、例えば昔は砂利を1回持ち上げたことがあるんですけども、これは大変重たいので最近は軽いチップ、足に優しいし、自然に優しいというチップを使用しています。この場合もそのチップや、それを入れる土嚢袋、それから水切りの板とか資材、そういう資材関係、それを県のほうで支援していただいております。

(コーディネーター鹿住氏)

支援していただいているということですね。

(茅野氏)

ちょっと言い忘れたんですけど、もう一つ大事なことは、行政から助成金という話は大事だと思うんですが、行政には人もたくさんいるので、その人たちに活動に協力してもらったりとか、実際汗をかいてもらうというところ、それが両立しないと、お金をもらっているだけというのではちょっとまずいんじゃないかなという、そこはいつも感じているところです。

(コーディネーター鹿住氏)

やはり行政もお金を、一つの団体に常にずっと払うというのは多分難しいと思うんですね。そういう意味では、活動の取っかかりとか、ある程度活動が軌道に乗るまではそういうお金というのは非常に必要なことだと思うんですけども、うちもいつも肝に銘じているのは、それに頼り切りになってしまうと、そのお金がなくなったときに立ち行かなくなってしまうということがあるということです。そこがやはり、先ほど茅野さんが1社に頼らずというお話があったんですけど、NPOとしては行政とのつき合い方もそういうことなのかなと。やはり自立できるようにしていくことが大切でしょうか。

実は、うちは行政からの委託事業は受けてはないんですね。それは、お金欲しさに委託事業を受けると、自分たちがやりたいことと違うこともやらなくてははいけない。事務局長という立場としてはやはりお金が欲しいので受けたくなくなってしまいうんですけど、ただ、それをすると本来やりたいことができなくなってしまうということがあります。なかなかそういう行政からの委託というのはずっと続くわけではありませんから、そこは肝に銘じなきゃいけないなというふうに思っています。うちも行政と一緒にやっている場合は、役割分担しながらお金を使うということ、自治体とですけども、しております。私が行政に求めることはお金もそうなんですけども、やはりNPOが自分たちで自活できるようになる、というんでしょうか、例えば会員が増えるようになるとか、そのようなことです。例えば、JUON NETWORKという名前が非常に怪しいので、信頼してもらえないんですけども、行政のいいところはやはり信頼性があるというところだと思うんですね。ですから、行政が1つの団体にこ入れするということはもちろんしてほしくはないんですけども、活動している団体を行政のところで紹介していただいたりすると、こちら少しは信頼してもらえるとということになりますので、そうやって紹介することでうちの会員になってくれる人が増えたり、寄付してくれる人が増えたりとかということがある。そういうことを行政にはバックアップしていただきたいなというふうに私は思っています。

今は行政との話だったんですけども、企業とNPOとの関係ですか。先ほど茅野さんからもありましたけども、企業にこういう支援をしてほしいとか、こう

いう関係を築きたいということがもしありましたら、いかがでしょうか。NPOと企業の役割というのでしょうか。

(有川氏)

みろくは今、全然企業とは関係はありません。ただ、私はゴミの、先ほどの写真のときに、飲料水メーカーのジュース瓶とかもういっぱいあったんですね。ああ、この写真を持って行って、おたくの商品はこんなになっておりますから、少し助成していただけませんかというのは正直言って一言申し上げたいなと思いましたがね。実際には行きませんでした。行きたかったんですけど……。そういうふうに思いましたが、どうなのでしょうね、そういうときって。例えば、知り合いの人がいるとか、そういうのだったらいいんですけども、ぱっと行って、企業の方は対応してくださるのでしょうか。

(コーディネーター鹿住氏)

対応してくれる場合もあるかと思います。その辺は茅野さんが詳しいのではないのでしょうか。

(茅野氏)

うちは営業担当の職員がいますので、回ります。営業回りをします。今年が目玉は何ですか、これにご支援くださいということでやりますね。大手メーカーの中には環境財団を持っているところもありますから、特に脈はあるんじゃないでしょうか。

(有川氏)

私もみろく山の会は、今810名、少し増えて815名ぐらいまでいっているかなと思います。でも、3月の末になると少し減ります。というのは、年度が変わりますから、会費の納入をしていただかなければ会員ではなくなってしまうので、それでちょっと減りますね。800名を切ると思います。でも、これにもございますが、年会費を1万2,000円いただいているんですね。それでやり繰りをしています。会員がすごく減った場合には、やりくりは大変です。やはり会員を減らさ

ないようにいろいろ努力をしています。

うちは山の会ですので、多様な山行を行うようにしております。リーダーだけでも現在140人以上のリーダーがいます。そのリーダーに幾つかの山行を組んでもらうとか、多様な山行、例えば近くは丹沢から、日本でしたら北海道から九州まで、そして海外登山も。いろいろな山行をやっております。海外も、厳しい山行からトレッキングの優しいところまで、いろいろ多様にやっております。そういうふうにして、一度会員になったらみろくを好きになってやめていかないような努力もしております。よろしいですか。

(コーディネーター鹿住氏)

茅野さんはいかがでしょう。大きい団体でもそれはやはり大変ですか。

(茅野氏)

そうですね。まず、自然保護協会は常に外から見られていることを意識しますから、レベルを維持できなければその仕事はやらないというようなことも、来年の事業を考えるこの時期には厳しい選択をすることもあります。27人の職員で一番いい効果を出せる仕事の組み方という形で、その年の個人の動き方というのを決めたりということをしています。

人材の維持という意味では、地域の方々が個人レベルで、あるいはコミュニティーレベルでやられている団体があると思うんです。その方々がどうやって仲間を見つけるかということが鍵だと思います。そういうときに、全国規模の団体である私たちのような団体や行政のようなところが、どうやって中間支援機能を発揮して、地域の中での仲間の掘り起こしということに有益な情報を、提供できるかなというのは、独自のネットワークを持っている自然保護協会としては大事ななと思っているところです。

(コーディネーター鹿住氏)

日本自然保護協会は皆さんもご承知のとおり、自然観察指導員という仕組みも持っていて、全国にたくさんいらっしゃいますよね。

(茅野氏)

はい。

(コーディネーター鹿住氏)

そういう人材育成の仕組みと、うちも森林ボランティア青年リーダー養成講座という、ちょっと長いんですけど、それを毎年継続していると、若い人たちは継続性難しいですね。ライフスタイルが非常に変わる時期なので、学生さんは卒業すると難しいですし、社会人も結婚したりすると、奥さんが山嫌いだったりすると来れなくなっちゃうとか、そういうこともあって難しいんですけども、そういう参加しやすい仕組みがあると、新しい人が入ってくるというようなこともあるかなというふうには思いました。

それともう一つ、今度茅野さんに対してご質問なんですけれども、「NPO・地域住民・行政という性格の異なる組織・団体の協力・協働・成功の秘訣を教えてください」というようなご質問なんですけれども、「説明いただいた中で、各主体の課題を重ねるというお話がありましたが、具体的な事例でこのことを教えてください」というふうに書いてあります。

(茅野氏)

例えば、今どんなことをやっているかというのと、昔使われていた道というのをツーリズム推進のために地域がもう1回掘り起こしたいという希望がありました。企画をされたのは3年ほど前なんですけれども、そのときに地域の方々だけでやるのではもったいないので、自然保護協会、サポーター、行政の立場で、この企画に対してやれることはないんだろうかというようなことを2回ほど会議をして詰めました。

自然保護協会は、その仕事のためにエコツーリズムの研究みたいな部分の助成金を取りました。助成金を使い、そこの自然的な資源の価値というのはどれだけあるのかということ进行调查するという企画を1年半ほどかけて組みました。その間に、行政のほうでもやれることというのを検討しています。例えば今こういうアイデアが出ています。できるだけ温泉街から1時間コース、2時間コース、4時間コース、8時間コースとか、そういう形でループ状にルートをつくりたいん

ですね。ところが一部の道というのが一般の方が通っていい道という形でつくられていないんです。それを地域に貸し出して、管理は地域住民の方々が主体的に行うというような形で、地域が管理に関与できるようにならないか検討しています。お互いがやれることを考えた上で、制度の運用を変えたり、これはやれないから、もう一つ別の行政機関の手を借りようとか、創意工夫をし合っています。そこは赤谷の森の中でエコツーリズムを実現させようとしているゾーンなんです。お互いやれることを出し合って、それを、どうやって重ねていったら一番いい実現の形がとれるだろうというようなことを組みながらやっています。

そのときに大事なのは、地域住民と行政機関だとやはり昔ながらの関係があるんですね。昔ながらの関係というのはやはりお上と人ですね。それから、私たちNGOと行政だと批判的な意見を交わしてきた間柄というのがあるわけです。その三者でやっているという緊張関係、実は協働というのは緊張関係なんですね。なれ合いの中で頼まれてやるという関係ではなくて、お互いやはりこれできないかということ突きつけてやっていますので、そこはある種の緊張関係があるわけです。そこが新しいものを生み出す力の源泉になっているというところ、そこを私は感じていますね。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございました。

そろそろという時間なんですけど、もうちょっと質問が出ております。

ボランティアの啓発活動ということで、ボランティア団体の行う啓発活動、先ほどの全体会のときでも、NPOの役割というところで言っていましたけれども、「ボランティアが行う啓発活動とはつまりどのようなものだと考えていますか」ということなんです。有川さん、どうでしょう。ボランティアとしてやれることというふうなことでもいいのかなと思うんですけども、啓発的ないろいろ知らせたりとかする活動についてお考えがありましたらお願いしたいと思っておりますけれども。

(有川氏)

私たちは登山者ですので、いつも丹沢を利用させてもらっています。その利用

している丹沢、利用ばかりしてはいけませんよね、返さなくてはとそう思っています。丹沢は先ほども言いましたように、神奈川県民にとっては命の森です。私たちに、生活面で一番必要な水を育んでいる森です。ですから、そのために、私たちが歩いて荒れたところは自分たちでできる範囲で補修をしていく。

それから、山登りは楽しい、自然はとてもすばらしいということ、これからを担う子どもたちに少しでもわかってほしい、広めていきたいと思っています。なぜこういう夏休み親子自然探検隊を始めたかといいますと、丹沢大山総合調査のときにある人が、昔、草の斜面を、滑ったり転がったりして遊んだ、何回もやったような気がしたが、よく考えたらたったの1回しかやったことがなかった、でもそれが忘れられないって話しをしていたんですね。ですから、私たちも自然の中の楽しい遊びは、子どもたちが例え1回であっても忘れないで、丹沢の森というのはすばらしいんだな、水を供給してくれているんだなということがわかってくれたらいいなと思っておこなっています。そういうことが啓発になるかなと思っております。

(コーディネーター 鹿住氏)

ありがとうございました。

茅野さん、何かありますでしょうか。

(茅野氏)

そうですね、私もいろいろなボランティアの方々と接する機会があったり、もともと自然保護協会のボランティア出身で職員になった口ですので、考えることはあります。ボランティアが啓発活動をやっている、その啓発活動の中身を工夫しないと人に伝わらないのではないかという問題を立てる前に、ボランティアそのものの存在というところがいかに社会に対して啓発の意味を持っているのかということ、そこを皆さん自覚していただきたいなと思います。

私が自然保護協会に関心を最初持ったのは、私は大学の専門が社会学でしたので、自然保護で食べているという人たちがいるというのはとても不思議なことだと思ったんです。で、どういう組織なのか見てみたいと思って、その組織に出入りを始めたのが最初の接点なんです。

何でこの人はこういうことに熱意を持って取り組んでいるんだろうと、最初は不思議だなと思うのかもしれませんが。そういう思いを関心のない方に持たせるといことが、それがまずボランティアや活動する市民に人材を集める最初の取っかかりをつくる意義だと思うんです。そういう方々が増えていけば流域は絶対に活性化しますし、流域の中でも広域に連携ができると思うんですね。うまく啓発できないから活動やめたではなくて、自分がそういう活動に身を投じている意味ということを考えつつ、全活動を地道に長くしていただきたいなという希望があります。以上です。

(コーディネーター鹿住氏)

ありがとうございます。

ボランティアの役割ということで考えても、うちも森林保全活動、実際に手を入れてという活動をしていますけども、実はボランティアにできるところは限られていますし、ボランティアだけでは山は守れないというふうに思うんですね、正直。そういう意味では林業がしっかりするとか、行政がきっちりしたお金を投入するとか、そういうことがあると思います。やはりボランティアの一番大きい役割としては伝えていく、ということでしょうか。先ほど自分自身の存在自体が、という茅野さんのお話にあったように、生の声、ということが大きいと思うんですね。

しかも、NPOというのは、先ほども言いましたけれども、公平・平等の行政とは違いますので、自分の視点で好き勝手に行っているんだと思うんですね。里山が好きな人は里山、私割と杉の木が好きなんですけど、人工林が好きな人は人工林。多様性というのが市民ということだと思いますので、好き勝手に自分の言葉で言えるということが役割でもあるし、あるいは同じ市民として、近い立場として伝えることができるのかなというふうに思います。

それでは、時間があと一、二分ということで、また全体会の中でまとめをさせていただきたいというふうに思っておりますので、もし言い残したことがありましたら一言と思いますが、いかがでしょうか。

(茅野氏)

プレゼンの中で時間がなくて触れられなかったのが、こういう流域という単位で物を考えるというのが、私はやはり重要なんだろうというふうに思っていて、最近いろいろな社会科学の研究成果の中でも、やはり人をまとめる単位として流域というのはある正当性をもって捉えられるんじゃないかという見方があらわれています。

流域の中では立場が違う人たちがいたり、森林も国有林から私有林から県有林から市町村有林からあるわけですけど、赤谷プロジェクトを通じて知らせたいのは、流域をどう守るかということ、その中で人々がどう協働していったらいいのかということですので、さきほど山梨県知事と神奈川県知事のエール交換もありましたが、そういう意味では神奈川というのはおもしろいところなんだろうなと思いますので、注目していきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。（拍手）

（有川氏）

みろく山の会はクラブ活動なんですね。自立した登山者を育てる、全部リーダーにおんぶにだっこというのではなく、自分が自立した登山者になるために自分自身も努力をする、そういう会です。それはボランティア活動も同じではないかなと思います。自分のために自分が成長していくこと、それが大事じゃないかなと思っております。

どうも今日はありがとうございました。

（コーディネーター鹿住氏）

お二人とも、どうもありがとうございました。

有川さんのほうから最後コメントがありましたけれども、やはり好きだから、自分が好きだからやるんだという、これが多分NPOとかボランティアの原点だと思うんですけども、そういったお話が大変よく伝わったなというか、教えていただいたなというふうに思います。今日はNPOの役割ということとNPOを活性化させる仕組みということで、NPOの役割については行政の公平・平等というところと違って、好きだからやるとか、あるいは茅野さんから、違う立場の人たちと一緒に協働していくとお互いに学び合いがあるんだというようなことで、

多様な主体がかかわっていくということの意義や、その一つとしてのNPOの役割ということがお話の中で聞けたのかなと思います。

また、NPOを活性化させる仕組みについては、私のほうからもちよつと言いましたけれども、自立に向けてというんでしょうか。資金のことで言えば、日本自然保護協会は、経験も長いと思いますので、企業に依頼をするいろいろなノウハウをお持ちのようです。あるいは飲料水メーカーにチャレンジしてみようかという話もありましたけれども、そういう企業とか行政との関係の中でまた活性化して、NPOが自立していくような仕組みというのもこれから求められていくんじゃないかなというふうに思います。

それではここで分科会を閉じさせていただいて、全体の報告会のほうにつなげさせていただきたいと思います。

この時間、ご参加いただきましてありがとうございました。（拍手）